CLOSE-UP INTERVIEW

妖怪文化研究家

木下 昌美さんに聞く

［聞き手］脇浜 紀子さん 京都産業大学現代社会学部教授

妖怪研究を通して文化や習俗を読み解き人の営みの奥深さに触れる

きのした・まさみ
1987年生まれ、福岡県出身。同志社女子大学学芸学部日本語日本文学科卒業後、奈良女子大学人間文化研究科（現・人間文化総合科学研究科）博士前期課程修了。妖怪文化研究家として、講演や妖怪ツアーなどを行う。2019年に『すごいぜ!!日本妖怪びっくり図鑑』（辰巳出版）を上梓。2016年3月より毎月第一月曜に電子新聞「奈良妖怪新聞」を発行している。

大学で妖怪について学べることに感銘を受ける

脇浜　本日は、妖怪文化研究家の木下昌美さんにインタビューさせていただきます。木下さんは、同志社女子大学学芸学部日本語日本文学科で鬼の研究に携わり、新聞社に就職した後、妖怪文化研究家として幅広く活躍されています。今回は、どうして妖怪に興味を持ったのか、また大学時代はどのような研究に取り組んでいたのか、そして妖怪文化研究家としての活動についてまで幅広くお話をうかがいたく思います。

早速ですが、木下さんはいつ頃から妖怪に興味を持たれたのでしょうか。

木下　小学生の頃にちょうど学校の怪談ブームがありまして、周りには怖い話があふれていました。私のクラスでも「トイレの花子さん」が出たと言ってクラスメイトがパニックになってしまったり、「呪いのビデオ」や「呪いの手紙」と呼ばれるものが出回ったり。そんな出来事があったからか、いつの間にか、妖怪やお化けなど不思議な存在に興味を持つようになっていました。

脇浜　今日、着ていらっしゃるお洋服は水木しげるさんのキャラクターがデザインされたものですね。やはり水木さんの妖怪の世界からも影響は受けましたか。

木下　水木しげるさんの作品は、子どもの頃、アニメでよく観ていました。テレビドラマにもなった『のんのんばあとオレ』も小学生の時に読み、強く印象に残っています。

脇浜　水木しげるさんの作品から妖怪に興味を持つ子どもはたくさんいると思います。我々の世代でも「コックリさん」が流行ったり、不思議なことに興味を持つ時期はありましたが、大学で研究を行うまで興味を持ち続けられた理由は何だったのでしょうか。

木下　高校時代に通っていた塾の先生の影響が大きいですね。妖怪やお化けが好きな先生で、色々な本を貸していただきました。その本で、妖怪について研究してきた人たちがいることを知り、「妖怪も研究対象になるんだ」と感銘を受けました。そこで、妖怪について学べる大学を調べていたところ、神話・説話文学がご専門で、当時、同志社女子大学で教鞭を執られていた寺川眞知夫先生が、授業で鬼を取り上げていることを知り、進学を希望しました。

歴史ある古都で研究する魅力

脇浜　大学では鬼に関する研究をされていたそうですが、寺川先生の影響だったのでしょうか。

木下　高校生の頃に、歌人の馬場あき子さんが著した『鬼の研究』という本を読んで影響を受けたことが、先にきっかけとしてあります。お化けの種類が多様化したのは江戸時代のことで、それまでは鬼や天狗、土蜘蛛など、限られた種類しか語られてきませんでした。そこで、古くまで歴史を遡ることができる鬼を研究対象とすることにしました。

脇浜　鬼というと最近話題になった漫画、アニメ『鬼滅の刃』が思い浮かびます。木下さんはどのようにご覧になりましたか。

木下　私は漫画が大好きなので、『鬼滅の刃』も連載開始時からずっと興味深く読ませていただきました。漫画では人間が鬼になるという設定がありますが、実は鬼という概念は大陸から渡って来たもので、〝人が死ぬと鬼になる〟という伝承が古くから語られてきたのです。そういう意味では、『鬼滅の刃』に出てくる鬼は、比較的伝統的な鬼像を踏襲しているのではないでしょうか。また作中では鬼の首を切るシーンが多々出てきますが、どこか大江山の酒呑童子（しゅてんどうじ）伝説を彷彿とさせます。

脇浜　なるほど。そういう見方もできるのですね。大学時代のお話に戻りますが、印象に残っている授業などはありますか。

木下　大学の授業はどれも面白かったですね。百人一首を読み解いたり、能の先生や京人形作家など日本の伝統を受け継ぐ方々のお話を聞けるなど、京都にある大学ならではの授業を楽しみながら受けていました。大学コンソーシアム京都の単位互換制度を活用して、京都学園大学（現・京都先端科学大学）で開講されていた妖怪文化論の授業を受けにいったことを覚えています。

脇浜　大学では具体的にどのようなご研究をされていたのですか。

木下　『今昔物語集』の仏教説話を読み解き、そこに登場する鬼について調べました。仏教の教えを説くために鬼が使われていたり、儒教や道教など海外の思想や宗教が基になったと思われる鬼が登場するなど、鬼の様々な側面を知ることができました。

木下 昌美さん

脇浜　木下さんは福岡県のご出身で、大学進学で京都に来られましたが、妖怪や鬼の研究をされるうえでメリットなどは感じられましたか。

木下　学生時代に過ごした京都も、現在活動の拠点としている奈良も、その昔、都があったという点で、やはり歴史・文化を研究するのに適した場所だと思っています。例えば、『日本霊異記』という平安時代に成立した日本最古の仏教説話集には、元興寺というお寺に現れた鬼を退治する話が出てきます。そのお寺は今も奈良県に残っており、千数百年も前の伝承を身近に感じることができます。そうした場所が多く残っているのは、やはり京都、奈良だからこその魅力ですね。

フィールドワークの重要性と難しさ

脇浜　妖怪文化研究家として活動されるようになった経緯を教えていただけますか。

木下　大学卒業後は、奈良女子大学大学院人間文化研究科（現・人間文化総合科学研究科）の博士前期課程に進み、研究を続けていました。博士後期課程まで進みたいという気持ちもありましたが、悩んだ結果、就職して奈良日日新聞社の新聞記者になりました。そこで取材のやり方を学ぶ一方、奈良県の妖怪に関する情報を独自にブログで発信していたのですが、ブログをご覧になった方から、執筆や講演の依頼が来るようになりました。また、同じ頃、妖怪専門書を出版している大和政経通信社から執筆の依頼があったこともきっかけとなり、妖怪文化研究家という肩書きで独立して活動していくことを決めました。

脇浜　妖怪文化研究家として在野で研究を続けられているとのことですが、どのような研究手法をとってらっしゃるのでしょうか。

木下　大学や大学院で研究を行っていた時と同じで、図書館や資料館に通って関連資料を調査するのが基本です。奈良県は都だったこともあり、昔の地誌や僧侶の日記などが多く残っています。例えば、世界遺産にも登録されている興福寺の住職が三代にわたって記した『大乗院寺社雑事記』に天狗に関する記述が残っているなど、様々な文献に妖怪の情報が散らばっているわけです。それを探し集めるのは結構大変

脇浜 紀子さん

な作業ですね。

脇浜　フィールドワークなどもされているのでしょうか。

木下　基本的には奈良県内ですが、伝承が残る土地を実際に訪ねて現地の方にお話を聞いたりもしています。

脇浜　妖怪研究の難しさはどのようなところにありますか。

木下　まず、この資料のここを見ればいいというものがないので、一から自分で文献を探すのに時間がかかります。また、現地調査をするにしてもお話を聞ける方がなかなか見つかりません。古い伝承をご存知の方はすでに亡くなられている場合が多いですし、核家族化が進んだこともあり、かつてはおじいちゃんおばあちゃんが孫に話していたような地元の昔話も語り継がれにくくなっているのです。また、そうした地元の伝承を知っていても語りたがらない人もいます。一度だけ、「そんな話を聞きに来て、この地域を馬鹿にしているのか」と怒られたこともあります。取材を進めていく中で、思いもしなかった難しさも経験しました。

脇浜　お話を伺いながら、新聞記者を経験されているからか、ジャーナリスト的な視点もお持ちなのだと感じました。やはり人からお話を聞くことはとても重要だと私も思います。

木下　お話を聞いてみると本に書かれていない新たな事実がわかることもありますし、本に載せた伝承を読んで、「これはうちの先祖のお話です」という反応をいただいたこともあります。そうしたことが起きるのは、やはり聞き取り調査を行っているからこそだと思います。今後は聞き取り調査ができる情報源がさらに減っていくでしょうから、今のうちにできるだけ調査して、妖怪に関する情報を収集しておく必要があるとも考えています。

脇浜　そうして様々な歴史ある場所を訪ね歩かれる中で、不思議な体験をされたりしたことはありますか。

木下　私はそうした体験はまったくないんです。実際には妖怪やお化けの存在は信じていません。妖怪そのものに興味があるというよりも、妖怪が登場する物語や妖怪を取り巻く文化や習俗の方に、むしろ興味があります。例えば、鬼という存在に対して昔の人はどのようなことを考えていたのか、なぜそうした伝承を残そうと考えたのか、そういったことの方に関心があります。そう考えると、妖怪よりも、妖怪を生み出した人の方に興味があるのかもしれません。

風土や文化との関連性を探る

脇浜　土地と妖怪の関連性を感じられるような印象的な

事例があれば教えてください。

木下　奈良県南東部の吉野郡上北山村などには、「一本だたら」という妖怪の伝承が残っています。一本だたらには様々なスタイルがありますが、その多くが一本足の妖怪として伝わっています。フイゴを踏み続けたことで片足が弱った、たたら製鉄の鍛治師が伝承のルーツになったなどと言われることもあります。そんな一本だたらは、旧暦の12月20日だけに現れるとされており、伝承地域ではその日は外に出るなと言い伝えられてきました。その日は「果ての二十日」と呼ばれ、忌み日とされていますが、実際、積雪が多く危険な日であることが多いのです。そうした土地の気候と妖怪の関連性も面白いですね。

また、奈良県五條市大塔町には、「送り狼」という人の後を付いてきて送り届けてくれて、時には危害を加えるものの話が残っています。大塔町では、毎年1月に篠原踊（しのはらおどり）という行事が行われるのですが、それは狼避け祈願として行われたお祭りが起源だと言われています。他にも、化け物に人身御供が捧げられていたという伝承が残る地域に独特のお祭りが伝わっているなど、妖怪と伝統行事の関わりについても今後は調べていきたいと思います。

脇浜　現在は奈良の妖怪の研究に注力されているとのことですが、他にフィールドワークで訪ねたい場所などはありますか。

木下　日本全国北から南まですべて興味がありますし、海外の妖怪も面白そうだと思います。色々な場所に行ってみたい気持ちはあるのですが、奈良県内だけでもまだまだ調査すべきことがたくさんあり、そこまで手を広げるのは難しそうです。私が生きている間に研究できるとすれば、奈良県とあとは地元の福岡県の妖怪くらいではないでしょうか。

人の営みがある限り妖怪は生まれ続ける

脇浜　木下さんは、２０１９年に『すごいぜ!!日本妖怪びっくり図鑑』という本を上梓されました。私も大変楽しく読ませていただきました。この本はどのようなきっかけで執筆されたのでしょうか。

木下　ありがとうございます。出版社の方からお話をいただいて、初めは大人向けの妖怪本を作ろうということで

企画がスタートしたのですが、結果的にイラストなども入れて子どもも楽しく読めるような形に仕上がりました。ただ、難しい言葉を使わないようにする以外は、あまり子ども向けということを意識しなかったので、大人が読んでも十分に楽しめると思います。

脇浜　「コワすぎる」「ナゾすぎる」「ツヨすぎる」など「〇〇すぎる妖怪」という形でカテゴリー分けされているのがとても面白いと思いました。

木下　子どもに興味を持ってもらえるようにカテゴリー分けを進めました。ただ、妖怪を分類するのは思った以上に難しい作業でした。例えば、河童の場合は、害を加える悪い河童もいるし、そうでないものもいる。どの特性にフォーカスを当てるべきかかなり悩みました。

脇浜　近年のコロナ禍で、アマビエという妖怪が注目を浴びました。その現象を木下さんはどのようにとらえたのでしょうか。

木下　アマビエは江戸時代後期の瓦版で初めて登場した妖怪です。疫病退散のお守りとして、アマビエを描いた絵やグッズが流行しましたが、瓦版の記述を見ると、アマビエは「当年より豊作が続くが、併せて疫病が流行する」、「自分の姿を写せ」ということは言っているのですが、「疫病を収める」とは一言も言っていないのです。SNSで話題になったことから、いつしか疫病を追い払ってくれる存在として人気になりましたが、江戸時代のアマビエと現代のアマビエは別物になったように思います。しかし、コロナ禍の収束を願う人たちの思いがそうした形で表れ、少しでも心の拠り所となったのは良いことだったのではないでしょうか。

脇浜　昔から疫病であったり戦争であったり、社会情勢が不安定な時期に不思議なことが起きるということはあったのでしょうね。

木下　東日本大震災が起きた後、幽霊の目撃談が相次いだと言われており、NHKでも特集が組まれました。突然の大災害で身近な人を失い、現実を受け入れられない方々にとっては、幽霊の話もある意味、救済になったのかもしれません。普段は気にかけていなくても、何か大きな出来事があると妖怪や幽霊が流行るという現象は昔から続いています。そう考えると、世の中で何かしら意味がある存在なのでしょう。

脇浜　自然災害や疫病など人間の力ではどうしようもな

いものを妖怪などに置き換えて気持ちを納得させてきたのかもしれませんね。『すごいぜ!!日本妖怪びっくり図鑑』にも、「くねくね」のような最近生まれた妖怪が掲載されていました。人々の不安の中から、今後も新しい妖怪が生まれてくるのでしょうね。

木下　「くねくね」はインターネットの掲示板サイトで生まれ育った比較的新しい妖怪です。他にも現代の環境に合わせて新しい妖怪が生まれています。昔の人たちが様々な妖怪を生み出してきたように、人の営みがある限り、妖怪のような不思議な存在は生まれてくるのだと思います。

脇浜　妖怪文化研究家として、他にはどのような活動をされていますか。

木下　奈良に伝わる妖怪のお話を紹介するネット新聞『奈良妖怪新聞』を毎月発行しています。また、妖怪に関する講演を行っているほか、近年はコロナ禍で実施できていませんが、妖怪にまつわるスポットを案内するツアーなども企画しています。普通の旅行では行かないような場所を訪ねるので、参加者の皆さんには楽しんでいただいています。また、最近は『妖怪めし』という妖怪漫画の監修もさせていただいています。

妖怪と共に〝冒険〟は続く

脇浜　ここまでお話をうかがってきて、木下さんはずっと〝冒険〟をしていらっしゃるのだと思いました。妖怪を求めて見知らぬ土地を訪ねることで脳内にアドレナリンが湧き出しているような。

木下　本来はインドア派なのですが、冒険をしたいという気持ちは子どもの頃からありますね。ずっと本を読んで現実逃避しているような子どもでしたが、だからこそ現実にはいないけれどいてもおかしくないような気がする妖怪の存在に惹かれたのかもしれません。

脇浜　また、大学に籍を置いて研究するのも良い冒険になりそうに思います。

木下　そういう思いはありますので、機会があれば挑戦したいですね。

脇浜　これからもぜひ、妖怪と共に冒険を続けてください。本日はありがとうございました。